

コーチングを行ってきた著者が
これまでの経験から得た
「チャンスをつかむ10+1のルール」

夢をかなえる 魔女のルール

生きづらさを抱える
2人の男女が人生を
変えた物語



2025年10月7日発行

株式会社あさ出版（代表取締役：田賀井弘毅、所在地：東京都豊島区）は、高橋明希 著
『夢をかなえる魔女のルール』生きづらさを抱える2人の男女が人生を変えた物語』を2
025年10月7日（水）に刊行いたします。

路地裏のバーで出会ったママ・通称「魔女」との物語を通して紹介

「成功したい」「幸せになりたい」と願いながらも、努力が結果に結びつかないのはなぜか――。
その答えは、チャンスをつかむためのルールに基づいて行動していないからです。本書は、長年経
営者向けのコーチングを行ってきた著者が、多くの人との出会いと体験を通じて導き出した
「チャンスをつかむ10+1のルール」を、物語形式でお伝えします。
舞台は東京の繁華街の路地裏にあるバー。そこにやってきた悩める男女二人と、魔女みたいな
ママとの物語を通して、読者に魔女のルールを紹介していきます。幸せになるためのルールとは何
なのか。魔女はいったい何者なのか。物語を追ううちに自分自身に活かせるヒントが浮かび上
り、豊かな人生を手に入れるきっかけとなる一冊です。

書籍名 『夢をかなえる魔女のルール』

生きづらさを抱える2人の男女が人生を変えた物語

著者：高橋明希 ページ数：352ページ
価格：1,980円（10%税込）
発行日：2025年10月7日
ISBN：9784-86667-781-1



高橋明希（たかはし・あき）

株式会社武蔵境自動車教習所代表取締役社長、
BRILLIANTHOPE, Inc. CEO。
1976年東京生まれ。獨協大学経済学部経営学
科卒業、早稲田大学大学院（MBA）修了、法政大
学大学院政策創造研究化研究員を経てスタン
フォード大学に客員研究員として留学。現在は、
人を大切にする経営学会にて『日本でいちばん大
切にしたい会社大賞』審査員を務める。経営者向
けの講演、記事執筆、社長のためのコーチとして経
営者がイノベティブに活躍できるよう日米での
経験と知識を活かしてサポートしている。近年で
は、東京都が運営する「はたらく女性スクエア」に
て、女性リーダーがさらに活躍するようにメン
ターとしても活動を行っている。テレビコメンテ
ーターなどメディア出演多数。

プロローグ

「どうして、いつも上司に叱られるのかなあ。今日だって、俺はただ座って会議のことを考えていただけで怒鳴られたもんなあ。ママ、どう思う？」

ママは若い男性のほうを見ずに、さっき帰って行った客のグラスをていねいに洗っている。流れる水の音で男性の声は届いていないようだ。

「今の仕事、自分には向いてないのかなあ。でも、これといって得意なことはないし、辞めても就職できるところもなさそうだし。そもそも、ものすごい競争率のなかでやっとの思いで就職できた会社を簡単には辞められないし。世のなかって厳しいよなあ」

右手にある灰皿は、吸い殻でそろそろ山ができそう。何か返事がほしいのか、男性はまたママに話しかける。

「ねえ、ママ。俺、息を吸うだけで怒られているような気持ちになるんだよね。そんなにできない人間かなあ。今の仕事、本当に向いていないのかなあ。上司に文句を言われるたびに、自分が嫌になるよ。ママ、俺、どうしたらいいんだろう？」

ママは変わらず男性の話など聞いていないように、グラスを洗い続けている。

灰皿の横に無造作に置かれたポケットベルがブルブルブルと震え出す。灰が今にも落ちそうになったタバコを慌てて揉み消し、男性は「またか」と斜め右にあるポケットベルの液晶画面に視線を落とす。

「アスアサカイギ7ジ」

左手のくたびれたベルトの腕時計に目をやると、すでに午後十一時になるうとしている。「ふうっ」と大きくため息をついた後、「ママ、また来るね」と男性は立ち上がり、よれたコートに袖を通した。ママは大きな黒目で男性をしっかりと見つめながら、一言だけ話す。

「あっちゃん、どんなときも自分から挨拶をするのよ」

あっちゃんと呼ばれた男性はママに背中を向けたまま左手を振り、少し緩くなったドアノブを回しながらつぶやく。

「わかったよ、やってみる。この間もママに言われたとおりにやってみたら、新しい契約が取れたからね」

店を出ていく背中をじっと見守るママは、男性の今後を応援しているようにも見えるが、あまり関心がなさそうにも見える。男性はドアを出て、階段を見下ろす。足元を見ないと滑り落ちてしまいそうな急な角度がある階段を、目を凝らしながら下りる。

いつも、最後の段を下りると、なんだか足元がすくむような感じがあるので、段差は均等ではなく少々高さに違いがあるのかもしれない。

「この階段、危ないよな」と思いながら、視線を駅のある方向に向けると、古ぼけたバーの看板が目に入る。看板には「またね」と、今にも消えそうな文字で書かれている。

またね、か——。男性は苦笑して、初めてこの店を訪れたときのことをぼんやりと思い出す。

数カ月前に、仕事で大きな失敗をして上司にこつてりとしぼられ、やけ酒を飲んだ後のことだった。前後不覚になって記憶がところどころ飛んでいるが、迷い込んだこの店でママにやけに絡んでしまったことだけはよく覚えている。

「店のママって、もっと愛想がいいもんじゃないの？ 普通の店だったら」

ママは、何を考えているかさっぱりわからない目つきで一瞬こちらを見つめただけで、あとは何も言わない。客である自分がママに気を遣うような気まずさがあった。

このバーの魅力はいったい何なのかはわからないが、また訪れ、常連客のようになるとは、そのときは思っていなかった。